現代文明と知性について

縮小社会研究会生物多様性分科会
川崎尊康

冒頭に代えて

知性は全てを学び全てを紡いで愛を理解する
自らの誤謬を正すとき自身の解体をもためらわない
それは現代を生きる誇り高い知性の証し
欲が支配する世界に愛の自由はないのだから
人類の霊の進化を妨げないように
無垢な知性が愛の世界を築けるように
私たちはこの世の真実から目を逸らさないでいよう

１．文明の盲点

現代文明社会が抱える多くの問題は一定の思考原理に起因する。人類のあらゆる営みは少なからずその影響を受け、結果原理は揺るぎないものとなった。文明社会とはそれが機能的、有機的な連鎖で結合、拡大したものである。言い換えれば自己増殖を繰り返す思考原理の反映が文明社会である。人は自動的に社会に同調或いは隷属することになる。それは人間が集団を形成しその一員であることで自身である「個」とその個が形成する集団を存続させようとする生存本能と一致するが、個において真理を成就し他者にもそれを願う知性の本質とは異なる。従って現代社会において知性は必然的に自己矛盾をかかえることになる。

人間を霊的進化①に導くのが知性の本質である。それを知的本能と呼んでもよい。今日の問題は知性の制御を超えた欲望が文明を推進しているところにある。現代人の知性はその本能が萎え、知性であることを放棄したかのようである。

だがそれは人々の思考を呪縛する意図、即ち人類を一定の思考原理に従わせ、真の知性に近づけないように構築された文明社会の構造がなせるものである。社会の意向に忠実に生きることは、進んで被支配者の生を生きることになり、その結果構造は拡大、強化され、欲望に翻弄された知性はその本質を失う。人々にとって世界は人類の総意で築かれた偽らざる現実であり、その現実を積極的に生きることに過誤はなく、むしろ
人間として正しく、高潔でさえある。

しかしながら現実の世界は偽りと理不尽に満ちており、真の知性によって築かれたようには見えない。競争原理の限界とその致命的欠陥を感じながら、呪縛された思考故

その構造が見えないため、そこから抜け出すことができないのが現代に生きる人間の宿命であり、現代文明の盲点といえよう。

人類には霊的進化を遂げるための環境と物質的安定が必要である。現代の科学技術と人類が蓄積した富があればそれを提供することは難しくない。科学技術は１％の人間②の道具ではない。科学者とは神の摂理、宇宙の真理を読み解き理解し、その福音が遍く地上の人々にいきわたることを願う者である。「理解」とは自身に内在する愛をその
対象に向ける「行為」である。それ故人類の霊的進化のために科学技術が地上の隅々にまで手を差し伸べるとき、人はホモ・エクセレンス③（homo excellence /愛に覚醒したホモ・サピエンス）として新生し、真の知性によって生きることが可能となる。
現代文明は科学技術によって築かれ、人類はその恩恵の下に暮らしている。それ故科学は偽知性（ぎちせい）④に主導権を譲ってはならない。科学技術は科学者の真の知性に委ねられたとき人間が代行する神の技となる。真の知性とは人間に与えられた霊能を意味する。霊的進化とは本来の霊的存在に立ち返ることであり、真の知性＝霊能に目覚めることに他ならない。

現代の競争社会において「豊かさ」、「上昇」、「勝利」は他者を慮ることなく追求される。「自然や他者との調和」ではなく「それらに勝利し、支配すること」に価値がおかれた西洋合理主義の価値観であり、本来の日本人には相いれないものであろう。
民主主義は国民一人一人がより良い国家を求め続ける権利と義務によって成立し機能するが、正義と情熱を注ぎ続けなければ支配者の道具に変貌する。今日の社会とそこに生まれてくる未来の子供たちのためにも、我々は、常に自由で開かれた国家が如何なるものなのか考え、真の民主主義（民主制）を実現する義務を担っているが、その義務を果たすことが目先の自由と権利を主張することより民主制社会の実現に貢献することを忘れている。
だがその義務が果たされない原因が二つある。一つは後で述べる「洗脳」。もう一つは、それが本来の日本人にとって次元の低い概念だからである。西洋文明流入以前の
日本人は真の知性に生き、自然と対話することに幸福を見出して暮らしていた。人々は互いを霊的存在として認め、「個は全体に生かされ、全体は個によって良く保たれる」ことが当然かつ自然なことであった。彼らが築いた江戸の町が当時世界でも類ない優れた循環型都市であったことがその証左であろう。特筆すべきは、今日に言う都市計画の理念と人々の自然観が一致していたことであろう。それは自然との調和、即ち「全体と部分の調和」が何にもまして重要であるという哲学からきている。
江戸の社会は、今日の民主制が目指す人間性を重んじる社会の基本構造が既に完成していた実例であり、当然のことながらそこに息づく精神性は体制や思想で縛られたものではなく霊能と一体となった知性が生み出すものであった。それは人の遺伝子に、

全体と部分即ち自然と人間の最適な関係を目指す指向性が含まれていることを示しており生物多様性を自然な形で達成していたと考えられる。そのような観点から見た現代の民主制はその制度を支える一定の精神性すら義務によって維持するしかない次元の低い精神を想定した制度と言わざるを得ない。

「利子」や「配当」が成立、促進、加速させる経済原理は、愛を伴わないその指向性が支配者の欲望を暴走させる。地上の人類７０億がそのピラミッドを形成し、霊的進化など望まない人々にとってその上層部は豊かさの象徴であり、それを目指すことが人生の目的となる。だが頂上以外は頂上の為の生産装置でしかなく、その規模は人知を超え、人々はその存在にすら気づかない。そして自ら、「優秀な生産装置」になることを求め、躊躇なくその人生を選択するのである。

世界の経済をコントロールしている頂上の数ファミリー⑤が文明を操り、大凡人類の営みをすべて、彼らに利益をもたらす装置に変えてしまった。当然のことながら文明社会の構造とその思考原理は相互に補完し合い、それがうまく機能するようにできあがっている。そして彼らの生産装置、即ち我々のあらゆる労働が生み出す富の一部が日々
合法的に収奪され、彼らの富を天文学的額に押し上げている。

文明国家というおとぎの国の住人である私たちはこの国のコインを使ってどこかの国のご馳走を貪り、次々に生み出される遊具を片端から試さなければならないので利息が嵩んでもおとぎ銀行から借りるのである。

世界中にあるおとぎ銀行の総裁はもちろん、かの頂点に君臨する偽知性の総帥である。借り手が一国の政府になってもその構造は変わらない。ただ玩具が本物の戦闘機になって、尋常ではないその値段が諸経費込みと称し倍になったりする。画策された脅威に
対抗するために一機２００億円する戦闘機を十数機購入させられても驚いてはいけない。

明治以降日本には一般会計以外に、その数倍に及ぶという特別会計なる使途不明の国家予算が存在するが、税金という名目で強奪される我々の富は巧みなからくりを抜けて支配者に届けられる。それが彼らの利権のための戦争、あるいは真の独立を守っている国家⑥の体制破壊、そして全人類を彼らの管理下に置くための計画（New world order、世界統一政府⑦）につぎ込まれていても人々の知るところではない。

この文明世界が少数の人間に支配され、彼らの思惑通りに方向づけられているとすればこの世で起こる理不尽の説明がつく。心を尽くせば究明、解決できないはずのない
原因で多くの市民が犠牲になる騒乱が何故たやすく起こるのか。むしろその原因は戦争や紛争を起こすために画策され、意図的に引き起こされているとしか考えられない。⑧

途上国の貴重な財産である森林や淡水湖、島などの自然を他国の個人が所有し、そ

の利権を行使することがなぜ許されるのか。それはこの世界が彼らの欲によって支配されている証左であろう。

当局はなぜ多くの国民（日本では2017年現在国民の２人に１人が癌に罹患する⑨）に癌や糖尿病、心臓病そして認知症など致命的な病気を発症させる原因を追究し、それが証明された食品や薬品⑩を取り締まらないのか。また警鐘すら鳴らさないのは意図的に放置しているとしか考えられない。

二コラ・テスラ⑪の愛の結晶は何に姿を変えたのか。それは人類に無限のエネルギー⑫と豊かな食糧を供給すべく創造された。だがその尊い遺志は現在、本来とはかけ離れた目的⑬のために使用されている。

千島喜久男⑭やルイ・ケルブラン⑮の学説は何故無視され続けるのか。生体内原子転換⑯が起こっていることが認められなかったのは、当時人間の腸内に1000兆もの微生物が常在している⑰ことが知られていなかったからだけではない。失われる利権が許さなかったのである。人類にとってこの上なく貴重な彼らの研究成果を葬り去ることは
全人類への背信行為である。

水で走る車⑱はどこへ走り去ったのか。開発者スタンレイ・メイヤーの死は何を意味しているのか。

ガストン・ネサーンが発見したソマチッド⑲は人類の霊的進化のカギになるかもしれない。しかしその名を知る者は皆無に等しい。

主体的に思考しているか否かを判定する手段はない。それを検証する思考がこの世の原理に従っているからである。主体的な思考とは如何なる原理にも支配されない思考、すなわち真の知性による思考である。盲点は、「すべて見えている」と思っている間、存在している。「見ているつもりで実は見えていないかもしれない」と思えたときそれはすでに盲点ではない。なぜなら思考が、自らの執着から解放されているからである。そして執着から自身を解放することを学んだ思考は自分を支配している原理の存在にも気付くのである。

神仏の教えにすら執着してはいけない。否、むしろ神仏の教えであるからこそ執着すべきではない。例えば、神仏の教えを守ることと、その教えを主体的に生きることでは何が違うのか。それを守り、自らを律することが「その教えを主体的に生きる」ための方法であるとき、その「教え」は自在に息づき、常に学ぶ者に寄り添い、彼に「真理への気づき」を与える。一方それに従うことが目的となった「教え」は、学ぶ者の執着心がそれを戒律という名の知識に変える。その思い込み、即ち「知識」と、「知識となった戒律に従うこと」への執着の結果「教えを主体的に生きる」ことができない。なぜなら知識として所有された「教え」は学ぶ者の心に語りかけることができないからである。「所有物」は所有者の精神には成りえない。このように「執着」は一種の所有欲と見なすことができる。

「いかなる原理にも支配されない思考＝主体的な思考」を「何にも執着しない思考＝所有欲から解放された思考」と言い換えるなら、主体的な思考は所有欲から解放さ

れた思考であり、真の知性には所有欲がないという結論に至る。したがって真の知性の世界とは、欲が支配するのではなく愛が築く世界と言えよう。

「指月の法⑳」は「指への執着を捨て知性に委ねよ」と解釈できる。「月」は真我、即ち真の知性である。

２．洗脳㉑

A 私たちは何を洗脳されているのか。

⑴「豊かさ」とは何か。

洗脳により定義された豊かさ、目指すべき理想的な生活。

豊かさを望まない者はいない。しかし真の豊かさを定義することは難しい。そこでテレビが、「欲しいものが何でも手に入り、したいことが何時でもできる。それが豊かさです。」と教えてくれる。

⑵「上昇志向」は健全か。

洗脳による上昇志向は利己主義につながる。― 上昇志向に支えられた自己研鑽の努力にはその成果によって権力や富が与えられる。

努力してより高い地位に就き、より高度な技能を身につけることで快適で安定した暮らしが保証される。誰もがそれを健全な上昇志向の賜物であると信じて疑わない。

⑶「勝利」は美しいか。

洗脳に利用される「勝利の美徳」。― 勝利することは美しく勝利のために戦うことは善である。

例えばオリンピックの金メダリストは時に感涙するほど美しい。

⑷ われわれは民主主義を生きているか。

洗脳により民主主義の本質は失われる。― 我々は法により個人の自由と権利が保証される民主主義の下に生きている。

法を犯さなければ何をするのも自由である。それは民主主義の下で生きる人間の権利である。国が優先すべきは個人の自由と権利である。それが民主主義を支える個人主義の核心である。

B洗脳の目的

支配しやすい観念を植え付ける。⑴、⑵

陶酔、熱狂は世界の真相から人々の意識を逸らせる。⑶

誤った民主主義（本来は民主制）の概念は国家の理念と国民の愛国心を消し去る。⑷

知的、精神的エネルギーが霊的進化に向けられないように人々の暮らしに一定の方向性と目標を与え、そこに到達するための戦いは「人間的で美しい」という価値観を

植え付け競争原理の基盤とする。競争原理が構築する社会では人々が同じ目標を競って勝ち取ろうとすることが社会を拡大する原動力であるが、その結果人々は孤立する。競争社会の構造はいくら拡大、発展しても孤立している小さなピラミッドの集積に過ぎず、真の知性が創造する愛による連帯社会にはけっして至らない。

支配者にとって最も忌むべきことは人々が真の知性に目覚め、愛によって連帯することである。それは人々が、現代社会が欲によって支配されていることに気付くことであり、同時にその構造の崩壊を意味する。彼らにとってそれは是非とも阻止すべき要件であり、そのためには個人も団体も、そして国家もそれぞれが反目、対立していることが条件である。イデオロギーはそのために利用されてきた。

民主主義や個人主義は様々なプロパガンダによって国民に誤った解釈が与えられ、本来の民主制が始動することが無いように、メディアによって絶え間なくコントロールされている。「愛」はそれを追求し、表現することがタブーであるテーマの代表である。真の民主制は愛によって実現し、同時に国民が愛の本質を追求することで健全な社会が築かれていくように働く体制である。

(1) について

清貧、私はこの言葉に惹かれることがある。同時に浮かぶのが「金持ちが天国に入るのは駱駝が針の穴を通るよりも難しい」という聖句⑲である。これらは(1)の対極をなす価値観であるが字義どおりに解釈しても意味がない。「清貧」が示すのは精神の状態、在り様である。聖句は霊的必然性を表現しており、精神も霊的必然性も肉体がこの世（偽知性に支配された世界）に縛られないほど強く、その思考に真の主体性を与え、原理から解放された思考即ち真の知性でこの世を生きる存在に導くのである。

清貧という言葉の響きに惨めさや弱さを微塵も感じない。それどころか精神の強さに裏打ちされた晴れやかな品位すら感じられるのは、それが知性によって積極的に選択された生だからである。このような言葉が生まれる背景には原理とは無縁の、自由に展開する思考がある。駱駝の話からは生まれない高貴な風景がある。真の豊かさは真の知性が創造する世界に存在する。そこには愛という名の知的な気品が漂う。

(2) について

高度な文明をさらに高めるために人間の高い知能と精緻な技能が欠かせないのは言うまでもない。特にそれらが人々に有益、もしくは「有益に見える」⑳と同時に支配者に利益をもたらすかどうかが重要なポイントになる。条件を満たす研究者へは文明社会が差し出す「豊かさ」と名誉が与えられるのである。成功者は後進の目標となり社会の模範として構造に貢献する。愛の世界の出来事であればまことに健全なことである。

愛の世界とは高度な文明が覆っているはずのこの同じ地上に飢死する子供がいない世界である。異国の罪のない人々が暮らす町をボタン一つで破壊する人間がいない世界である。血のにじむ努力の結果確立された科学技術が研究者の願い通り人々のために活かされる世界である。支配者がその利権や既得権益を温存するために、科学者の優れた研究を隠蔽したり科学者諸とも葬り去ったりすることがない世界である。

(3) について

日々自己研鑽にすべてを捧げなければオリンピックで勝利することはできないだろう。それは厳しい修行の道であり、最後には相手ではなく自分に打ち勝つことが焦点になる。オリンピック本来の意義はスポーツを通して対戦者への愛に至ることであるが、それはスポーツに限らず己に打ち勝つ厳しさを経験したものが知る、同じ経験を積んだものへの理解である。であればこそ勝者は美しく、観戦者は選手たちと共に感動し彼らへの賞賛を惜しまないのである。そこに「洗脳」が入る余地は無い。オリンピックの意義は人々の心に深く刻まれる。繰り広げられた戦いは善であったと。

しかし洗脳はメディアによって、その賞賛と感動のお膳立ての上になされる。オリンピック・ゲームという名の「戦いの祭典」はその経済効果によって莫大な利益を生むと。それは一見無関係に思えるオリンピックと戦争（軍需産業の発展あるいは石油やガスその他天然資源の利権奪取のため、または負債＝デフォルト帳消しのための茶番劇）を繋ぐ巧妙な糸である。

かつて日本が過去の大戦（日清・日露・太平洋戦争）に参戦したとき刻々と変わる戦況に国民は一喜一憂した。今日、戦争も紛争もそれが世界のどこで行われていようと、まともな人間ならその破壊・殺戮行為に胸を痛めるであろう。人命が国家、あるいは正義の名の下で紙切れのように失われ、流された血は絶望と憎悪の連鎖を生む。

それでもこの世には戦争をしたがる人たちがいる。建て前がどうであろうと本当の目的は対戦国の地下資源やその他の天然資源、あるいは既得権益を合法的に？奪うことである。加えて兵器ほど利益をもたらす商品はない。戦争や紛争によって肥大する軍需産業は偽知性によって正当化されており、彼らに最大の利益を生んでいることは言うまでもない。そして我々は「勝利」という言葉に惑わされる。我が国は米国政府からオスプレイ戦闘機一機を通常の二倍、およそ２００億円で購入しているが、それは勝利を約束してくれる最強の兵器だからである。

科学技術の進歩が日進月歩の今日、次の「最強」が現れるのは時間の問題である。現代文明諸国はこうして次々に新兵器を購入しなければならない。そして我々の思考はメディアによってその現実が見えないように操作され、限られた社会構造、あるいは与えられた世界観に沿ってのみ働くようになっている。我々は洗脳された知性で思考し、洗脳された目で世界を見ることに慣れてしまったのである。

(4) について

隠蔽されている真実もいつか詳らかにされる時が来る。一見何の脈絡もないように見える

それらの一つ一つが時を超えて繋ぎ合わされると、そこに真実の歴史が隠されていることに気づく。重要なのは気づくことそのものである。一つの気づきが思い込みへの執着を取り除き呪縛から解放された知性が偽りの歴史を白日にさらす。

続く

脚注

1　霊的進化

川崎の造語。命あるものを全て霊的存在と位置づけ、人類の進化をその霊の進化と捉える。ダーウィンが進化論の展開に用いなかった概念。生物学的進化とは無縁。

2　１％の人間

人類の全資産の約半分を１％の人間が所有している。そのうち上位80人が所有する資産の総額は1兆9000億ドルで全人類の下位半数にあたる35億人の資産総額とほぼ等しい。国際NGO「オックスファム」の2015年1月の調査報告より。

3　ホモ・エクセレンス

川崎の造語。ホモ・サピエンスの次に来る人類。霊的進化を遂げた人類のこと。

4　偽知性

川崎の造語。物事を専ら損得、優劣などで判断し、真理を理解するために深く掘り下げない思考を許す知性。

5　頂点の数ファミリー

例えばロスチャイルド家の資産総額は１京円。所有する銀行リストは以下を参照。この中には日本銀行も含まれ、同行の株券９７％をロスチャイルド家が保有している。

http://www.google.co.jp/search?sourceid=navclient&hl=ja&ie=UTF-8&rlz=1T4SUNC_jaJP379JP379&q=The+Rothschild-Owned+Central+Banks+of+the+World+

https://www.youtube.com/watch?v=v9lp7UY75zU&list=PL5D839F0C9473CBEC&index=7&t=0s

6　真の独立を守っている国家

例えばリビアはカダフィー大佐によって真の独立国として守られていた。

https://www.youtube.com/watch?v=aLhw59uZM2U

7　New world order、世界統一政府

https://www.bing.com/videos/search?q=%e4%b8%96%e7%95%8c%e7%b5%b1%e4%b8%80%e6%94%bf%e5%ba%9c&&view=detail&mid=395EB2CCF0D25B0717F3395EB2CCF0D25B0717F3&&FORM=VDRVRV

https://www.bing.com/videos/search?q=%e4%b8%96%e7%95%8c%e7%b5%b1%e4%b8%80%e6%94%bf%e5%ba%9c&&view=detail&mid=9B637428CFD8881BA9169B637428CFD8881BA916&rvsmid=17D572006E1195B1344D17D572006E1195B1344D&FORM=VDQVAP

8　画策された戦争

例えば太平洋戦争の日本参戦に至る真実の経緯を当時のアメリカ人ジャーナリスト、ヘレン・ミアーズがその著書「アメリカの鏡、日本」（1949年D・マッカーサーが日本語翻訳を禁じている）の中で赤裸々に語っている。その内容は、インド人法律家パール博士が東京裁判で展開した「日本無罪論」と見事に呼応している。

9　日本人のがん罹患率

平成２６年４月現在、２人に１人が罹患し、３人に１人ががんで死亡。同年健康保

険協会報告より。

１０　重篤な病気の原因になる食品や薬品

http://www.geocities.co.jp/bancodesrt/special/monsanto2015.html
https://www.youtube.com/watch?v=U6f5neFmPDY&index=19&list=PL5D839F0C9473CBEC

１１　二コラ・テスラ

Nikola Tesla（セルビア語ラテン翻字）1856－1943

http://iss.ndl.go.jp/books/R100000002-I024165822-00

１２　無限のエネルギー

私たちを取り囲む大気中に、あるいは地球を覆う宇宙空間に偏在している電気エネルギー。二コラ・テスラはこれを取り出しテスラコイルで増幅すことに成功している。

１３　二コラ・テスラが目指したのは彼の科学技術、とりわけ電子工学と機械工学によって砂漠を緑に変えることであった。それは気象コントロール装置として完成していたが、彼の死後アメリカ軍によって没収されている。そして現在ハープ（HAARP）と呼ばれる気象兵器（表向きはオーロラの観測装置とされている）に姿を変え軍事目的や破壊工作に使用されている。

https://matome.naver.jp/odai/2129992326446738801
このような情報が公式に発表されることはない。

１４　千島喜久男

生物学者、医学博士　1899-1978　「千島学説」「腸内造血説」などで知られる。

https://ja.wikipedia.org/wiki/千島喜久男　「血液と健康の知恵」千島喜久男著　地湧社　「千島学説」忰山紀一　地湧社

１５　ルイ・ケルブラン

Corentin Louis Kervran 1901-1983 「生物学的元素転換」で知られる。

『生体による原子転換：N、K、Mgの実例』日本CI(1962), 桜沢如一訳　『自然の中の原子転換』日本CI(1963), 桜沢如一訳　『生物学的元素転換』朔明社(2003)　『微量エネルギー元素転換の地質学と物理学における証明』朔明社(2005)

１６　生体内原子転換

脚注⑫参照

１７　腸内細菌

「あなたの体は９割が細菌」アランナ・コリン著　河出書房新社

「土と内臓」デイビッド・モントゴメリー＋アン・ピクレー著　築地書館株式会社

１８　水で走る車

https://ameblo.jp/ghostripon/entry-10328859717.html

１９　ガストン・ネサーン

「ソマチッドと714Xの真実」稲田芳弘著　ガストン・ネサーン寄稿　（株）Eco・クリエィティブ

２０　指月の法

禅からきた言葉。「月を指す指を見るな。月そのものを見よ。」という意味。

座禅も読経もそれが目的になってはいけない。目的は月を見る、即ち自分の中の本当の自分（仏性＝真の知性）を見ることである。

２１　洗脳

「タビストック人間関係研究所」で検索

https://matome.naver.jp/odai/2147315545215726901
https://www.youtube.com/watch?v=EpwW1KdKlOs&t=0s&index=40&list=PL5D839F0C9473CBEC
https://www.youtube.com/watch?v=XayWCiI3GVQ

２２　新約聖書　マタイ19章16−26節